研 究 成 果 報 告 書

2022 年　8 月　18 日

1．所属・職・氏名 等

語学教育センター　准教授　豊嶋　朗子

2．研究課題（テーマ）名

非認知スキル向上のための英語学習タスクの学習動機･参加と認知スキル向上の可能性についての研究

3．研究期間

2021 年度の 1 年間

4．利用した研究費の種類及び金額

重点領域研究費交付金　20 万円

5．研究の概要

2019 年度-2020 年度に申請した本領域研究（以後「第 1 期研究」とします）の最終年度（2020 年度）が前年度と研究条件が異なり、調査方法によるデータ収集とその結果も当初計画し実施したパイロット研究とは異なっていた。よって、下記のとおり、再度パイロット研究と同条件で調査を行った。

-第 1 期で使用したアンケートを前期終了時と後期終了時の 2 回実施
-それぞれの結果を分析（各学期終了後）
-2 回の結果から認知スキル、学習動機・意欲の変化を分析中（令和 4 年 2 月現在）

本研究参加者は第 1 期とは異なり少なくなったが、120 名ほどからアンケートの回答を得た。

6．研究成果等

各教師が導入するタスクが学習動機・参加形成にまた、タスクで使用する上記で示した ICT は、教室内だけでなく教室外での英語学習動機・参加にもつながる可能性があり、学習継続から英語力向上につながることを提案できると思われる。自己概念（Self-concept）、民族言語活力（ethnolinguistic vitality）、目標言語やその仕様地域・話者に対する態度や考え方（Attitudes towards a target language, the areas the language is spoken, the native speakers of the language, Japanese speakers of the language）が特に本学学生の動機形成との相関が高いことがわかり、年度内の変化も担当教員や教員が導入するタスクにより異なり、有意な

変化があったクラスとそうでないクラスがあった。

また、研究対象科目であるEnglish CALLはCALLシステムを含むデジタルテクノロジーを使用して英語学習を進める科目であるため、この学習方法と主観的認知スキル向上が結びついているかどうかについてアンケートで回答してもらったが、今年度はすでにその効果について認識が高い学生が多く、年度末になっても変化が大きくなく、認知スキルの向上を認めた学生が80%以上となった。この主観性は正確性を表すものではないが、学習動機や継続には大きく影響するものと思われた。

しかし、その一方で、デジタルテクノロジーを使用した英語学習の効果を認めるものの、英語学習方法としてデジタルテクノロジーは部分的に使用し、教科書や紙媒体の教材を使用した学習を好む学生が半数以上を占めていた。これは、英語学習方法の固定化は英語学習初期段階で決定されているものであるという豊嶋の過去の研究の示唆と一致しており、英語学習が学校教育で行われてきた方法が固定しており、デジタルテクノロジーという手元にいつでもあるディバイスで気楽に英語に触れていくという習慣がない学生がほとんどであることがわかった。よって、本研究に参加した学生にとって英語はまだ「遠い」存在であることが示唆された。

7．研究の実績（論文・発表　等）

【論文】

第1期2回目の調査結果をコロナ禍における特殊な結果として研究紀要に報告した。

タイトル：「デジタルテクノロジー使用による英語学習への意識変化―コロナ禍での大学生の心情」

（英文タイトル）Changes in Attitudes towards Learning English Using Digital Technology: University Students' Mindsets amid COVID-19 Calamity

『都留文科大学研究紀要』、第95集、261頁-281頁、2022年3月発行

【口頭発表】

下記学会での講演に招待され、第1期、第2期の3年間にわたる研究結果を発表した。

学会名: 2022 6th International Conference on Linguistics and Literature

講演日：2022年7月26日

講演タイトル：Three-Year Research Project: Changes in Factors of Motivation to Learn English Affected by Using Digital Technology　(Online presentation)